

論文の内容の要旨

中国語の直示移動動詞の研究 — 文法化した“来”、“去”の意味と統語的特徴 —

相原まり子

日本語の「来る」、「行く」をはじめとする直示移動動詞は、通言語的にさまざまな機能語に文法化していることが知られている。現代中国語には“来 (lái)”、“去 (qù)”という直示移動動詞があり、“来”は話し手のいる場所への移動を表し（「来る」に相当），“去”は話し手のいる場所から別の場所への移動を表す（「行く」に相当）。中国語の“来”、“去”にも複数の方向への文法化が見られるが、本論文は、動詞句の直前に現れる文法化した“来”、“去”を考察対象として、意味および統語的特徴を明らかにし、中国語文法体系のどこに位置づけられるかという問題について論じた。さらに、共時的な考察を通して、文法化の道筋を推定した。最後に、通言語的な視点から“来”、“去”の文法化を眺め、他言語の直示移動動詞の文法化と類似、共通している点と特殊な点を指摘した。以下に、各章の概要を述べる。

第1章では、研究の目的、考察対象、データ、本論文の構成について述べた。

第2章では、例(1)のような、後ろに動詞句(=VP)を伴い、前に動作者名詞句(=NP_a)が現れる文法化した“来”(=“来_{fl}”)を取り上げた。

(1) 那好，你先休息，我来_{fl}做饭。

(じゃ、いいよ、あなた先に休んで、私にご飯を作るから。)

最初に、“来 f1” が次のような意味を表すということを明らかにした（〔話者領域【場】〕は〔話者が視点を置く場〕を指す）。

来 f1 : 後ろの VP が〔話者領域【場】〕において誰かが行う必要のある行為であるという
ことを前提として表示し、NPa の指示対象が〔話者領域【場】〕に心理的に移動して
その行為を実現させることを、話し手またはそれに準じる人物が希求していることを
表す。

“来 f1” の意味を論じる過程では、先行研究で指摘されてきた「積極性の含意」、「即時性・現場性の含意」、「聞き手との距離を縮める効果」が生じる条件やそのメカニズムが上記の意味からうまく説明できることを示し、さらに、“来 f1” の前に認識的モダリティ動詞を入れられない、後ろの動詞に完了や経験を表すアスペクト接辞を付けにくい、反語を除いて直前に否定詞を入れられない、“的” 構文に入れにくい、主語である NPa を省略できない、後ろの VP が省略可能であるといった複数の統語的特徴や NPa の人称の偏りなども、上記の意味から合理的に説明できることを示した。次に、“来 f1” をどのカテゴリーに分類するのが適切かという問題について論じ、一般的なモダリティ動詞/モダリティ副詞との意味および統語面における共通点、相違点を指摘した。“来 f1” はモダリティ動詞の後ろに用いることができる点では一般的な動詞と共通しているが、普通の動詞には見られない統語的制約が多数あることから、動詞というカテゴリーから脱範疇化しつつある段階の非典型的な動詞と見なすのが妥当だと考えられる。さらに、第 2 章では、共時的な考察を通して、後ろに VP を伴う物理的移動を表す“来” から“来 f1” への文法化の道筋を推定した。最後に、代動詞的用法の“来” と呼ばれる“来” には、“来 f1” を経由したことが確実なものもあれば、経路がはっきりしないものもあることを指摘した。

第 3 章では、例 (2) のような、後ろに VP を伴い、前に NPa が現れる文法化した“去” (= “去 f1”) を取り上げた。

(2) 能否给我一段时间，让我去 f1 考虑。

(私に少し時間をくれませんか、私に考えさせてください。)

最初に、“去 f1” が次のような意味を表すということを指摘した（〔他者領域【場】〕は〔話者が視点を置く場〕の外を指す）。

去 f1 : 「〔話者領域【場】〕内の NPa が、後ろの VP の表す行為を行うことを意図して
〔他者領域【場】〕に心理的に移動し、その行為を実現する」ということを非現実事態
として表す。

“的” 構文に入れにくい、後ろの動詞に付けられるアスペクト接辞が制限されるなどの統語的

特徴は上記の意味から説明できる。第3章では、“来 f1” との比較も行い、両者の非対称性を明らかにした。“去 f1” は、非現実事態に言及するのに用いられる点や心理的移動の意味をもつ点では“来 f1” と共通しているが、後ろの VP を「誰かがやるべき行為」として表示しているわけではなく、話し手の希求を表す機能も持たない。また、“来 f1” は後ろの VP の必要性を前提内要素として表示し、主語である NP_a を脱主題化するが、“去 f1” にはそのような情報構造表示機能はない。次に、“去 f1” をどのカテゴリーに入れるのが適切かという問題について考察を行い、典型的なモダリティ表現との共通点および相違点を指摘した。そして、“去 f1” も動詞から脱範疇化しつつあると見なせるが、“来 f1” と比べると脱範疇化の度合いは低く、普通の動詞がもつ統語的特徴を十分保持しているということを指摘した。次に、後ろに VP を伴う物理的移動を表す“去” から“去 f1” への文法化の道筋を推定した。最後に、“去 f1” と“来 f1” の非対称性が何に起因するのかという問題を考察し、考えられる要因として (i) 話者が〔他者領域【場】〕の事態を解決しようとする頻度が〔話者領域【場】〕のそれよりも低い、(ii) 〔他者領域【場】〕の事態解決に関する提案の頻度が〔話者領域【場】〕のそれよりも低い、という二つを挙げた。

第4章では、例(3)(4)のような、前置詞句や動詞句などが前に現れる文法化した“来”“去”(=“来 f2” “去 f2”) を取り上げた。

(3) 我按照这个理论**来 f2** 分析现代汉语的语序问题。

(私はこの理論にしたがって現代中国語の語順の問題を分析する。)

(4) 我们打算用这个办法**去 f2** 帮助他。

(私たちはこの方法を用いて彼を助けるつもりだ。)

最初に、“来 f2” “去 f2” は、それぞれ、以下のような意味を表すということを示した。

来 f2 : NP_a の指示対象が、後ろの VP の表す行為を〔話者領域【場】〕で行うことを目的とし、前に現れる成分の表すやり方で実現することを表す。

去 f2 : NP_a の指示対象が、後ろの VP の表す行為を〔他者領域【場】〕で行うことを目的とし、前に現れる成分の表すやり方で実現することを表す。

“来 f2” と“去 f2” を入れ替えても意味の差異がはっきりしない場合と入れ替えられない場合があるが、このことは〔話者領域【場】〕と発話の場の関係からうまく説明できる。「目的の実現」は現実事態のこともあれば、非現実事態のこともあるが、前の成分が連用代詞、副詞の時は非現実事態に傾き、前の成分が形容詞、時間詞、方位詞の時は非現実事態に限られる。次に、“来 f2”、“去 f2” をどのカテゴリーに入れるのが適切かという問題を論じた。等位接続テ

ストの結果は「来 f2/去 f2+VP」が一つの構成素を成していることを示しており、「来 f2」、「去 f2」を後置詞と見なすという先行研究の分析には問題がある。「来 f2」、「去 f2」の現れる位置は一般的な動詞と共通しており、動詞の一つと見なすことも可能であるが、両者は、後ろの VP を NP_a の目的として特定の領域に定位し、前の成分をその目的の「実現のさせ方」として表示する、という共通の機能をもっており、互いに対立する要素である。したがって、動詞に分類するとしても、「来 f2」と「去 f2」が一つのセットとして、動詞の下位カテゴリーを形成していると思なすのが適当である。また、第 4 章では、「来 f2」、「去 f2」が、連動文の一つ目の VP の位置に生起する使役移動表現「動詞 (+非直示的方向補語) +移動物 NP+来/去」に含まれる方向補語の「来」、「去」(=「来 c2」、「去 c2」)を経由して生まれたという先行研究の推定を土台とし、「来 c2」、「去 c2」から「来 f2」、「去 f2」への変化の道筋について新たな仮説を提示した。再分析により、「来 c2」、「去 c2」が「使役移動関連動詞 (+非直示) +移動物 NP」から切り離されて後ろの成分の一部になり、「使役移動関連動詞 (+非直示) +移動物 NP」が「実現のさせ方」という情報を担う一つの句になったことで、類推による一般化が起り、「実現のさせ方」を表す他の動詞句、前置詞句なども「来」、「去」の前に生起できるようになったという変化のプロセスが想定できる。第 4 章では、さらに、「来 f2」と「来 f1」、「去 f2」と「去 f1」をそれぞれ比較し、共通点と相違点を指摘した。最後に、「来 f1」、「去 f1」、「来 f2」、「去 f2」の文法化の度合いについて考察を加え、いずれも、意味が抽象化し、拘束的な形式になっているが、「来 f1」「去 f1」は、「来 f2」「去 f2」と異なり、互いに対立する要素ではなく、一つの閉じたクラスを成しているとは見なせない、ということ述べた。

第 5 章では、通言語的視点から「来」「去」の文法化を考察し、他言語の直示移動動詞の文法化と複数の類似点、共通点があることを明らかにした。さらに、「来 f1」が獲得している情報構造表示機能（後ろの VP が表す行為の必要性を前提内要素として表示し、主語 (NP_a) を脱主題化する) および「来 f1」が表す話し手の心的態度の二重性（「誰かが後ろの VP の表す行為を行う必要がある」、「NP_a による VP の実現に対する希求」）は、他の言語の研究では報告されておらず、このような文法化は特殊である可能性がある、ということ指摘した。最後に、本論文全体のまとめと今後の課題を述べた。